

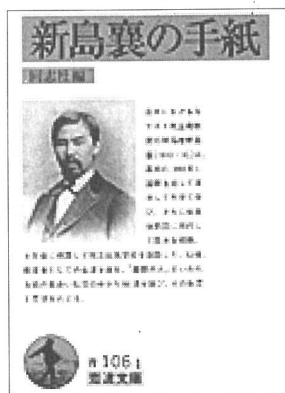
このたび同志社創立130年記念事業の一環として、『新島襄の手紙』（同志社編）が岩波文庫から刊行された。本書は、1954年に出版され広く親しまれてきた旧版『新島襄書簡集』の編集方針を見直して、内容を一新し、最新の新島研究の成果を加えた「新版」である。文語体を読むことに慣れていない現代の若者にも、読みやすいような工夫が随所に施されていると同時に、新島自身が使った独特の風格を持つ文体を残す努力もされている。その意味で、本書は、『新島襄全集』と『現代語で読む新島襄』とを結ぶ位置にあるといえるであろう。同志社創立130年に当って、この本が新島研究と同志社教育にとつての新たな「必読書」の一冊として加えられたことを、心から喜ばしく思う。

本書では、『新島襄全集』を定本として全部で96通の手紙が採用されているが、うち新規に採録された手紙は56通、旧版と重複しているものは40通となっている。新島がアメリカの友人らに送った英文の手紙が読みやすい現代語に訳されて22通収録されていること

『新島襄の手紙』を 岩波文庫から刊行

才藤 千津子

新島学園短期大学助教授



も、本書の新しい魅力の一つといえるだろう。

しかし、旧版と比べた際の本書の何よりも大きい特徴は、「書簡の人」といわれる新島襄の人間味あふれる等身大の実像を、彼の手紙を通して浮き彫りにしようとしていることである。旧版にみられた、いわゆる「新島先生らしくない」箇所を作為的に排除することは今回改められた。人間的な悩みも抱えていた新島が書いた手紙のありのままの原文を掲載することによって、現代に生きる若者にとつて、より親しみやすい人間新島の姿が伝わってくる。

本書の編集に当たられたのは、大谷實（同志社総長）、北垣宗治（大学名誉教授）、伊藤彌彦（法学部教授）、本井康博（神学部教授）の先生方である。これらの編集委員会のメンバーは、各自分担で仕事を進めたあと、最終的には全員合議の上ですべてのテキストを審議、確定したと記されている。これら編集委員の方々の革新的な編集方針と地道なご努力に、深く敬意を表したいと思う。

2005年は創立130周年を記念して、原点たる新島精神への認識を新たにし、学内外へ啓蒙を図る行事が開催された。ラットランドからボストンまで歩く「新島メモリアルウォーク」、新島ゆかりの地での講演会・展示会等の法人行事とは別に、アメリカでの「新島裏の足跡をたどる旅」

が8月に企画され、同志社関係者32人が参加した。本書はこの旅の貴重な指南書となった。

本

書は、1865年7月、新島が乗船したワイルド・ローヴァー号のボストン到着から、1874年11月、アメリカン・ボード準宣教師として帰国するまでを中心に、その前後や周辺の経緯を64頁にまとめられている。新島のアメリカでの生活と勉学のすべてを息子のように支援したハーディ夫妻、兄となつて新島を支えたティラー船長、新島の篤い信仰心に触れ、感動を持つて遇した下宿先のヒドゥン

女史、同じ下宿で勉学や聖書を教えてくれたフリント夫妻、フィリップス・アカデミーのティラー校長、アーモス

『ニュー・イングランドにおける 新島 裏ゆかりの場所』を刊行

井上勝也・
北垣宗治 共編



(学校法人同志社発行)

ト大学のシリー教授等、新島の真摯な求道の姿勢と行動によって、見も知らぬ異国の人々が心を動かされ、アメリカでの父母となり兄弟となつて、新島に対する手厚い支援の手が差し伸べられていく様子が生き生きと描かれている。

本

書を教材に、編者の一人である北垣氏の講義を受けながら現地を回る「新島の足跡をたどる旅」は、

今まさにその建物から新島やハーディが現れそうな錯覚さえ感じる、不思議な実感を伴う旅となった。コンパクトな本書ではあるが、読み返すたびに感動が新たに、新島のひたむきな行動と、それを支えたアメリカの人々の信仰に裏付けられた大きな懐に胸が熱くなる。同志社に学ぶ学生や教職員が、本書を携えて新島の足跡をたどり、その地に立つて新島の息吹を肌で感じたいと念願してやまない。

大学学術情報課長

落合 万里子

「京都・宗教系大学院連合」の設立

「建学の精神」再活性化の契機に

■設立の経緯と目的

「京都・宗教系大学院連合」は、2005年7月31日に設立された。大谷大学大学院文学研究科（浄土真宗）、高野山大学大学院文学研究科（真言宗）、種智院大学仏教学部（真言宗）、同志社大学大学院神学研究科（キリスト教・イスラーム・ユダヤ教）、花園大学大学院文学研究科（禅宗）、佛教大学大学院文学研究科（浄土真宗）の7つの大学院および大学がその加盟校となっている。またこの他、5つの研究組織が加盟団体として参加している。

同連合は、宗教の多元化が進行する中で、京都を中心とした宗教系大学の大学院が、それぞれの宗教や宗派の特色を生かした教育プログラムを展開し、次世代の宗教研究者、宗教指導者、宗教に関するプロフェッショナルとなる

る人材育成を行い、研究上の相互交流を図ることを目的としている。また、京都を中心に形成された、このような学術ネットワークを広く世界にオープンにし、国際社会との学術交流を促進することをめざしている。

目下、加盟大学院間の単位互換制度の実施（2006年度から）をはじめ、具体的な取り組みのための検討を進めている。こうした宗教系大学院の連合体は国内で例がないだけでなく、世界的に見ても非常にユニークである。今後は、京都の文化発信力の中核を担う存在として、その基盤を整えていく予定である。最新の情報についてはウェブサイト（<http://www.kgurs.jp>）をご覧ください。

■同志社にとっての意味

130年前、同志社が設立されたとき、京都市民、とりわけ仏教勢力からの猛烈な排撃運動にさらされた。当時、

新島襄は批判の矛先をかわすのに精一杯であった。それゆえ、もし新島が、仏教の研究者とキリスト教の研究者が深い信頼関係を取り結び、京都や日本の将来について語り合っている今日の様を見れば、腰を抜かすに違いない。建学の精神を支えてきたキリスト教を取り巻く時代状況は、それほど大きく変化してきたということでもある。

文明の覇者としての自負に満ちていた米国から新島が学び取ってきたキリスト教を、現代の我々は同じ形で反復することはできない。近年、神学部・神学研究科は従来のキリスト教研究から総合的な一神教研究へとその射程を広げてきたが、同様に、同志社もキリスト教主義の現代的意義について大胆に問い直すべきであろう。伝統の中核たる宗教が、今、新たなフォーメーションのもと、伝統の殻を打ち破ろうと共振し合っている。同志社の建学の精神も、そのダイナミズムの中から、新しい姿を現すかもしれない。

大学神学部教授

小原 克博

「幼児期から異文化に触れる」

幼稚園が英国の幼児学校と交流協定締結

同志社幼稚園と、英国ヨーク市所在のエーコン幼児学校との間で、2005年10月28日に異文化理解を促進するため、お互い協力し合うことに同意し、交流協定調印式およびお茶会を行いました。エーコン幼児学校は、ロンドンとエジンバラのほぼ中間に位置しているヨーク市にあります。ヨーク市は、中世の面影が残る観光・文化都市で、市内中央に位置するヨーク大聖堂は、英国国教会活動の北の中心地となっているそうです。このヨーク市には、ヨーロッパで最も古いパブリックスクールのひとつであるセント・ピーターズがあり、その学校とのつながりを持っているエーコン幼児学校が日本の幼稚園との「交流」を希望されていました。名称に、幼児学校となっていますが、学校ではなく3歳児前後の幼児教育機関です。



前列、堂腰園長とスーザン・ブラウンマネージャー。
後列の右端は中村久司博司。

今回の協定締結の仲立ちを行って頂いたのは、国際的な教育・学術・文化交流を推進されている英国ヨーク市所在のヨーク・セント・ジョン・カレッジ（1841年創立・英国立リーズ大学のカレッジのひとつ）の日本プロジェクト担

当官・中村久司博司です。これから国際社会のなかで生きていくためには、異文化との交流と理解が必要であ

ると思います。幼児期から、世界のさまざまな自然、暮らし、文化について関心を向ける。そして、世界のさまざまな国に、どのような人々が住み、またどのような言葉や遊びがあるかを知る。いろいろな歌を歌ったり、踊ったり、めずらしい服を身につけているなど、いろいろな事を知ることによって、少しでも世界に目が向けられ楽しさが味わえたらいいと願っています。

幼稚園児ですから幅広くは出来ませんが、出来ることから少しずつ交流を進めたいと考えています。今後は、電子メールなどを使って、日常の園生活・各種行事、さらにはヨーク市と京都の文化活動の写真交換や、園児の絵や作品の交換などを行っていく予定です。

このような諸活動を通じて、幼い時期から異文化に自然と触れさせていきたいと思っています。

幼稚園長

堂腰 きみ子

同志社京田辺祭^{まつり}2005を開催

―地域に開かれたキャンパスをめざして

大学京田辺キャンパスは京阪奈丘陵の北端に位置し、今出川キャンパスを都市型とすれば郊外型キャンパスと言えます。文科系の1・2年次生が主に通い、工学部や文化情報学部施設の並ぶ理系要素の強い点、また、広大なスポーツ施設が展開するキャンパスといった特徴があります。今出川キャンパスの歴史あるEVEとは一味違った、これらの特徴を生かした催しを企画しました。

2005年1月の京田辺市との連携協力に関する包括協定の締結や現代GP(けいはんな知的特区活性化デザイン)の提案、特色GP(大学コミュニティの創造)の採択なども開催の後押しとなりました。

11月4日午後6時過ぎから京田辺市長のご出席をいただき、ラーネット記念図書館前広場で前夜祭を開催。笙・

筆^{ひらり}演奏等のオープニングイベントに続き、八田大学長挨拶の後、同志社徹



章と京田辺市市章を象った花火を打ち上げ、好天にも恵まれ幸の良い祭りのスタートとなりました。

5日、6日は体育会の協力によるスポーツフェスティバル、大森一樹氏(映画監督)の文化情報学部開設記念講演会、工学部研究室公開、言語文化教育研究センター外国人教員による民族料理教室、有栖川有栖氏(作家)のトークライブ、図書館閲覧開放、映画上映、京田辺市主催の和楽器演奏会、地域住民出店のフリーマーケット、車椅子体験等の障がい支援体験、(財)日本自動車協会の協力によるエコカー試乗会、モンゴル国雪害救援に賛同いただいた出演者のLIVE演奏等々、多彩なプログラムを実施しました。

京田辺市による無料シャトルバスが運行され、特に好天に恵まれた5日は近隣の小学生や子供連れも多く見られました。参加者は、3日間で延べ約4000人を数えました。

(大学京田辺校地総務課)